



文化の日と 明治の日



内田芳邦

- 第1章 「文化の日」と「勤労感謝の日」
- 第2章 条約改正への辛苦
- 第3章 カタカナ語と和製漢語
- 第4章 言語改革論
- 第5章 漢字を廃止してしまった韓国
- 第6章 「和製漢語」の特徴 日本語の特殊性

2018年は、明治維新から150年の節目にあたる。

<2018年に明治維新から150年を迎えるのを前に、祝日法を改正して11月3日の「文化の日」を「明治の日」に改めようとする動きが、保守系の市民団体や国会議員を中心に本格化している。戦前の「明治節」の復活を意図しており、識者からは「文化の日は憲法記念日と一対のもので、名称変更は歴史に逆行する」との批判もある。・・・（これに対して「明治の日」に改めるべきとする人々は）「日本の近代国家としての立脚の原点は明治。明治の時代こそ大切だったと全ての日本人が振り返る日にしたい」、「本来のあるべき姿に戻したいとの素朴な思いがあるだけ」>などと述べている（時事ドットコムニュース 2016年11月2日）

10年以上も前の11月3日のことだが、英会話教室で講師の米国人から「文化の日」って、何する日なの？と訊かれたことがある。

“What is Culture Day? What do you do for the day? Why is Culture Day on November third?”

「文化の日ってどういう日？なにをするの？11月3日がなぜ文化の日なの？」

この素朴な質問に私は戸惑ったが、次からは以下のように答えてきた。

“It was originally the birthday of the Emperor Meiji. Meiji period was the beginning of Japan’s modern period. They struggled and succeeded in modernizing Japan. It’s the day that we should recall it.”

“Oh, I asked some of my students why? But no one knew that.”

“It’s because it isn’t taught at school.”

「もともとは明治天皇の誕生日なんだよ。明治時代は日本の近代の始まりで、当時の人々は苦勞して日本の近代化に成功したんだよ。だから、その苦勞に感謝し、当時を偲ぶ日なんだ」

「ああ、そうなんだ。生徒の何人かに訊いたけど、誰も知らなかったよ」

「学校で、教えられてないからだよ」

ふつう、国家の祝日は、どこの国でも歴史的記念日か宗教に由来する。「文化の日」などという曖昧な祝日は存在しない。しかし、私は、外国人から質問されるまで、子供

の頃から慣れ親しんできた「文化の日」という名称に違和感を抱いたことは一度もなかった。考えてみれば、Why is Culture Day on November third? 「11月3日がなぜ文化の日なの？」は、実に当たり前の疑問だと思う。この当たり前の疑問が、当たり前に思い浮かばないところに問題がある。

私は戦後の昭和21年（1946）生まれだが、小学校でも中学校でも「文化の日」が実は「明治節」とか「天長節」といって明治天皇の誕生日だったのだと教わった記憶はない。

これまた10年以上前だが、ボランティアで日系ペルー人の子供たちの勉強や宿題の手伝いをしていたときのことである。ボランティアの代表の方から、日系ペルーの子供と親たちに「日本の祝日」について、その由来や意義を聞かせて欲しいと頼まれて当惑した。「文化の日」のことを思い浮かべたからだ。とりあえず、法律に当たってみた。

「国民の祝日に関する法律」 昭和23年（1948）制定

第1条 自由と平和を求めてやまない日本国民は、美しい風習を育てつつ、よりよき社会、より豊かな生活を築きあげるために、ここに国民こぞって祝い、感謝、又は記念する日を定め、これを「国民の祝日」と名づける。

（第2条の中からの抜粋）

文化の日 11月3日

自由と平等を愛し、文化をすすめる。

勤労感謝の日 11月23日

勤労をたつとび、生産を祝い、国民たがいに感謝しあう。

愕然とした。「自由と平等を愛し、文化をすすめる」って、いったい全体、これは真面目に考えた文言だろうか。そもそも、「文化をすすめる」という日本語があるのだろうか。

もういいや、実は、もともとは「天長節」とか「明治節」といって、明治天皇の誕生日なんだよ。明治の日本人は、官民一体となって苦勞して西洋文明を採り入れ、近代化に成功し素晴らしい成果を後世に残してくれたので、そのことに感謝し偲んで祝う日だよ、と説明すればいい。しかし、じゃあ、なぜ名前を変えたの？と訊かれた場合、い

や訊かれなくたって説明がなければ論理的ではない。そのところを日系ペルー人の子供たちや親に上手に説明できるだろうか？と不安になったのだ。

「文化の日」の次の祝日「勤労感謝の日」もはっきりしない。もともとは、一年の収穫を神に感謝する「新嘗祭^{にいなめ}」だった。「新」は新穀を「嘗」はご馳走を意味し、新穀を得たことを神さまに感謝するという意味だ。古くから日本人は、稲作農耕の神様に対して、年始には豊穰をお祈りし、秋にはその収穫を感謝してきた。そして、現在もお全国の神社で、年初めには「祈年祭」、秋には「新嘗祭」という「お祭り」が行われている。

私の住む町は、世帯数1100前後の小さなものだが、「神社総代」や「年行事」という役をそれぞれ10人ずつ住民の間から選出して、神社を管理し祭りを運営している。任期は2年の全くのボランティアで、私の父も私自身も務めた。年間20日ほどの週末が年間行事にあてられるので、定年後であればともかく、現役世代はとても大変だ。

役がまわってくればしかたがないが、できればご無礼したいというのがふつうの感覚かなと思うが、役について行事の準備が始まると、みな愚痴もこぼさず手抜きもしない。不思議な気もするが、先人の辛苦があるからこそ現在があるのだと感謝し、前世代から現世代が受け継ぎ、それを次の世代へと伝えていく。そういうことが毎年欠けることなく、全国でおこなわれている。それが、つまり伝統であり文化だと思う。

この「新嘗祭」の日、宮中では天皇が感謝をこめて新穀を神々に祭り、自らも召し上がる祭祀が行われる。全国の神社で「氏子総代」の役についた者が氏子である町の住民を代表して氏神に対して祈り感謝するように、天皇が全国の民を代表して執り行う神事だと思う。「氏子といわれたって、そんなことオレは知らないよ。勝手に町の住民を代表して神様に祈ったり、感謝したりしないでくれる」と、だれも文句を言わない。それが、日本の神事であり、伝統・文化だと思う。

祝日の「新嘗祭」が戦後「勤労感謝の日」となって、「生産を祝い、国民たがいに感謝しあう」となった。この文言は、いったい何が言いたいのだろう。「一年の収穫を神に感謝しお祝いする」という、古代より綿々とつきない日本人の素直で自然な気持ちが微塵も感じられない。「新嘗祭」のもつ農耕儀礼の伝統と文化が完全に取り除かれている。

それは、神道や皇室の祭祀を否定したGHQの指令に基づいたものだからである。しかし、その指令を出した米国にも、11月に「感謝祭」(Thanksgiving Day)という祝日がある。起源は1621年、イギリスからアメリカに移住した人々が、アメリカでの初め

ての収穫を神に感謝したことによる。つまり、その精神は、日本の「新嘗祭」と同じだろう。この感謝の気持ちは、農耕に従事する人々にとって、洋の東西を問わず、秋の収穫時には、おのずと湧き上がってくる自然な感情ではないだろうか。しかし、GHQは日本の「新嘗祭」にはNOを突きつけた。日本の伝統文化としての神道が、「軍国主義」のバックボーンにあると考えたからである。全くの誤解である。

敗戦後の日本はGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の占領下にあった。GHQといっても実質は米国当局で、マッカーサーがその最高司令官だった。

GHQは日本人に対して、米国や連合国に対する批判を一切禁止し、「日本がいかに悪い戦争をしたか、日本軍がいかに残虐であったか」を宣伝し「教育」した。さらに戦前の日本の政治・社会、伝統文化、日本精神などをことごとく否定した。

今からはとても信じられないことだが、『方丈記』も『徒然草』も『平家物語』も発行禁止で、「日の丸」の掲揚も「君が代」も禁止、学校では柔道部も剣道部も廃止された。祝日のいくつかも廃止させられ、名前を変えられた。

＊参考文献；『日本人を狂わせた洗脳工作』（関野通夫著 自由社）、『方丈記』（講談社文庫「序」）

それにしても、「文化をすすめる」とか「生産を祝い」という「国民の祝日に関する法律」の中の不可思議な文言には、どう考えても合点がいかない。もしかしたら、日本語としては意味不明だが英語にすればGHQの指令をパスできるのではないかと考えた「苦肉の策」なのかもしれない。この法律の制定に関わった人々は、占領が終われば「祝日法」は再び改正されるだろうと考えたに違いない。

自国の祝日の意味を知らず、外国人から訊ねられて返答に窮する日本人が多いということは実におかしなことで、また情けないことでもある。私自身が長い間そうであったが、自国の祝日の意味を知らないということは、日本の伝統・文化や歴史を知らないということにもなる。「文化の日」などと曖昧な名称でごまかしてきた祝日を本来の姿に戻そうという声があがってくるのは当然のことだろう。

2008年、11月3日を本来の「明治の日」に戻そうと「明治の日推進協議会」が設立され、「国家の独立を守り抜いた明治の先人に思いをはせる日」と訴えた。しかし、その一方で、「明治の日実現をめざす動きについて、戦前回帰の政治的意図が隠されている警戒する声もある」と朝日新聞（平成27年10月22日）は報じている。

祝日のもつ本来の意義に戻すため名前を変えて「明治の日」しようという動きに対

して、「戦前回帰の政治的意図が隠されている警戒する声」があり、それが問題だと報じるメディアがあるのも理解できる。そういう観点で、戦後、私たちはずっと過去を批判してきたのだからだ。しかし、現代の価値観のみで過去を批判するのは妥当ではない。明治という時代を評価し批判するのであれば、当時の国際社会の価値観やルールにのっとり、そしてまた、その時代に生きた国民の視点に立たなければフェアではないし、真実も見えてこない。そして、現代を生きる私たちへの遺産にもならないと思う。

まごまごしていれば欧米列強の植民地にされてしまう。そんな苛酷な環境の中で、明治の人々はどのように考え、どのように対処したのか、そして、なにを成し遂げたのか。そろそろ、私たちは、先入観なしに素直な心で振り返るべきではないだろうか。

欧米列強の圧倒的な圧力の中で、近代国家の建設に取り組み、それに成功した明治の人々の辛苦があったからこそ現代の日本がある。先人たちの労苦に感謝しその業績を祝う、それをまた次の世代へと伝えていく、そういう受け継ぎがなければ社会も文化もそして国家も継続し発展していかない。

江戸時代の日本は大小300弱の諸藩からなる封建国家であった。明治維新（1868年）翌年の「版籍奉還」によって、全国の土地と人民は天皇（新国家）のものとなったが、実質的な支配権はあいかわらず各藩に残されていた。明治4年（1871）の「廃藩置県」で、藩に残されていた軍事と徴税の権限は新政府のものとなり、同年「身分解放令」によって身分制度も廃止された。続いて、明治政府は、学校制度・徴兵制度・租税制度の改革を推し進め近代国家建設の基盤を固めていく。

廃藩置県の大改革を成し遂げた明治政府は、岩倉具視を全権大使とする使節団をアメリカとヨーロッパに派遣した。留学生43人を含め総勢110人からなるこの使節団派遣は、日本近代史の転換期をなす。使節団派遣の目的の一つは、幕府が結んだ不平等条約を改正するための予備交渉だった。

幕末に江戸幕府が欧米列強と結んだ条約は、さまざまな点で不平等な条約であった。例えば「相手国に領事裁判権を認める」というのがある。外国人が日本で罪を犯しても、日本の法律で日本の裁判所が裁くのではなく、「その国の領事が裁判を行い、その国の刑法を適用する」。欧米列強は、その理由として、日本には近代法が整備されていないからだと主張した。

明治新国家は江戸幕府を倒して作ったものだから、江戸幕府が結んだ条約は無効である、という考え方は国際法上通用しない。国と国が結んだ条約は、政権や体制が変わっても有効なのである。

使節団は、最初に訪れた米国で大歓迎された。しかし、いざ条約改正の話となると相手にされないどころか、日本にとってさらに不利な条件を要求された。これはダメだと悟った使節団は、以後、条約改定の交渉は一旦あきらめ、欧米諸国の文明・産業・政治・経済の視察に専念する。近代的な産業や制度を採り入れ欧米諸国に追いつかなければ、そして近代国家を作らなければ、欧米列強に圧倒され征服されてしまう。留学生の中には米国に留学した5人の女子がいた。最年少は津田梅で数え年8歳。他の4人の年齢は9歳、12歳、15歳、16歳。皇后から書面で「婦女の模範となれ」と励まされた幼い少女たちの心情を思いやると胸が熱くなる。

明治6年（1873）3月、オランダからドイツに入った使節団は、11日、ドイツ帝国初代皇帝ヴィルヘルム1世に謁見し、15日には、ビスマルクに招宴された。その席で、ビスマルクは次のような趣旨の演説をした。

＜外交でなく武力によってドイツ統一を成し遂げたと、イギリスやフランスなど大国

から非難されるが、我々が志しているものは、自主独立と対等な外交である。国際法といっても、大国は自国に有利な場合には法に従うが、法が自国に不利に働く場合は武力に訴えて国益を確保する。これが国際社会の実情であり、法とか正義といっても、それ自体が国力によって左右され、その国力は経済力と軍事力によって左右されるのである。>

＊参考文献「岩倉使節団『米欧回覧実記』田中彰著」（岩波現代文庫）

不平等条約改正どころか、その予備交渉ですら相手にされなかった明治政府の指導者たちに、ビスマルクのこの演説は身にこたえただろうと思う。帰国した彼らは、迷わず「殖産興業」、「文明開化」、「富国強兵」を唱えて近代国家建設にとりかかった。

明治19年（1866）、イギリス貨物船ノルマントン号が紀伊半島沖で暴風雨のため沈没した。このとき、船長以下26人のイギリス船員は救出されたが、日本人乗客25人は全員船中で水死した。しかし、領事裁判で、日本人は英語がわからないためボートに乗るよう勧めたが応じなかったという船長の弁解が通って無罪となった。激高した世論に押されて日本政府も抗議したが、それでも禁固3カ月の賠償無しであった。この事件を境に、治外法権を撤廃するための条約改正を求める国民の声はいっそう強まった。

しかし、依然として、欧米列強は自国に有利な条約の改正には応じなかった。不平等条約に対する口実を取り除いて、欧米列強を条約改正交渉のテーブルに着かせるためにも、また近代国家建設のためにも、まずは憲法と国会が必要である。明治の指導者たちは痛感した。

明治15年（1882）3月、伊藤博文は、憲法調査のためベルリンへ向かった。伊藤はベルリンとウィーンで憲法と近代国家の成り立ちを学び、翌3月に帰国した。

明治22年（1889）には、アジアで最初の近代憲法「大日本帝国憲法」を発布した。戦後のGHQによる「思想統制」の効果で、この憲法は民主的なものではなかったと思いきこんでいる人も少なくないが、近代法の原理である「法の支配」（国家権力を法で拘束する）や「法治主義」（国家権力の行使は法に基づく）を有する立派なものである。

37条「すべて法律は帝国議会の協賛を経るを要す」

64条「国家の歳出歳入は毎年予算を以て帝国議会の協賛を経るべし」

この憲法に基づき行われた第1回衆議院総選挙（1890）も2回目も、議席の多数を獲

得した野党である自由民権派は、予算に反対して政府に抵抗し、政府を追い込み、のちに議院内閣制的運営を実現した。いわゆる「大正デモクラシー」は、この憲法があったからこそ実現できたのである。

明治24年（1891）、来日中のロシア皇太子を滋賀県大津で警備を担当していた巡査津田三蔵が突然サーベルを抜いて斬りかかり負傷させた。いわゆる「大津事件」である。当時の日本は、なんとか欧米列強の植民地にならずにがんばっていたものの、まだロシアに軍事的に対抗する力など持っていなかった。仰天した日本政府は、ロシアに配慮して、犯人を死刑にするよう裁判所に圧力をかけた。しかし、大審院長児島惟謙は、圧力に屈せず法律に乗っ取り謀殺未遂罪を適用し司法権の独立を守り抜いた。

この件は海外でも大きく報じられ、国際的に日本の司法権に対する信用を高め、当時進行中であった不平等条約改正への弾みとなったと評価されることもある。

結局、条約改正の実現は、日清戦争の直前の明治27年（1894）に一部が、そして、日露戦争後の明治44年（1911）になって完全に達成されることになる。要するに、外交というものは、正義でも理屈でもなく国力次第ということで、それは現代でも同じことだ。

浅草の雷門通りを東に歩くと隅田川手前の交差点の角に明治13年創業の『神谷バー』というパブがあって、店先で観光客を相手に『電気ブラン』という名のカクテルを販売している。昨年、友人と浅草を訪れたとき、一杯やろうと中を覗いたが満席だったのであきらめて土産に『電気ブラン』を購入した。ケースの中に栞が入っている。『電気ブラン』とは、ブランデーをベースにワイン、ジン、キュラソーを加えたもので、「名前の由来は当時文明開化の影響から、西洋の洒落たものには『電気〇〇』と名付けられた」とのことだ。明治15年から製造・販売された。なるほどと感心して、他にも「電気」のつく電気とは全く関係ない言葉というか品物はないかといくつかの辞書に当たってみたが、今のところ見あたらない。

辞典で「電気」について調べてみると「江戸中期にはオランダ語を音訳して『エレクトル』という語を使ったが、幕末からは中国人が近代になって使用した『電気』をそのまま借用して、それが一般化した」とある。

明治になって、英語の electricity を「電気」という漢語で、例えば、ある新聞が使用し始めたとしても世間一般に普及するには時間がかかっただろうし、その意味もなかなか理解されなかっただろう。なにしろ「電気」はそれまでの日本には存在しなかったのである。それで当初、人々は西洋から入ってきた洒落たものには「電気〇〇」と名づけた。であれば、当時は、似たような使用例が他にもいくつかあったのだろうが、やがて「電気」の意味が正確に知れわたると「電気〇〇」の使用法はすたれてしまった、ということかもしれない。

西洋と接して、それまでの日本にはなかった物や概念が入ってきたとき、その西洋語を日本語の中に取り入れる方法は二つある。①ひとつは、外国語をそのままの発音でカタカナ表示する。もちろんこの場合は、日本語なまりのカタカナ語となる。②もう一つの方法は、新しい日本語をつくるのである。

①カタカナ語（西洋からの借用語）

手っ取り早いのはカタカナ語である。幸いなことに日本では、奈良から平安時代にかけて表意文字の漢字をもとに音標文字の片仮名と平仮名がつくられていた。それを使えばよい。写実主義を主張して日本の近代文学の誕生に貢献したと評価される坪内逍遙の『当世書生気質』（明治18年 1885）には、英語をそのままカタカナ語にして日本

語の中に混ぜて使っている。

「よっぽど君をラブ（愛）している」「ちっとヘルプ（手助け）すればよかった」「アンコンシャス（無感覚）になりおった」「吾輩のウオッチ（時計）ではまだテンミニツ（十分）位あるから」「ブック（書物）を買いに」「実にこれはユウスフル（有用）じゃ」

なんだか、まるで「トゥギャザーしようぜ」の「ルー語」でブレイクしたお笑い芸人のルー大柴氏みたいだが、逍遙氏の場合はギャグではなく真面目に考えてのことだったと思う。

カタカナ語は、英語だけではない。ポルトガル語、スペイン語、オランダ語、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロシア語など、日本語の中には、西洋からの様々な借用語（外来語）が入っている。これはつまり、日本がそれらの国と関わってきたということ。そういう歴史があったということである。

1543年8月の、いわゆる「鉄砲伝来」が日本と西洋との出会いである。以後、江戸時代初期1639年の鎖国令までの約100年間、ポルトガル人およびスペイン人との貿易が行われ、長崎の街にはポルトガル人やスペイン人が住み、日本人妻との間に混血児も存在した。

食べるパンも、雨降りに身につけるカッパも、お菓子のカステラもポルトガル語が起源だが、さらに公園のブランコは「バランス」を意味する *balanco*、「天ぷら」は「味付け、調理」を意味する *tempero* が語源だという。それどころか、「おんぶにだっこ」の「おんぶ」は *ombro*（肩）に由来するという説もあるから、びっくりする。日本がポルトガルと深く関わった歴史を思い知らされる。なおタバコはスペイン語で、パンはスペイン語でもパンだ。「聖母マリア」はポルトガル語もスペイン語も同じで「マリア」、英語では「聖母メアリー」だ。

ポルトガル語の次はオランダ語だ。

1600年関ヶ原の戦いの半年前、オランダ船が九州の大分に漂着した。2年前にアジアを目指して、オランダのロッテルダムを出港した船団5隻のうちの1隻であった。

オランダと敵対関係にあったポルトガル商人やイエズス会の宣教師達は、「オランダ人は海賊で、オランダから被害を受けない国はありません」と進言し死刑を要請したほどだったが、家康はそれに耳を貸さず、手厚く待遇した。やはり、家康は賢くて ^{ふところ} 懐が深い。

オランダ名門貴族のヤン・ヨーステンは家康の信任が厚く、国際情勢についての顧問

として家康に仕え、江戸と長崎に住宅を与えられた。東京駅の八重洲口は彼の名に由来するそうだ。つまり、彼の和名「耶楊子（やようす）」から「八代州」そして「八重洲」。

3代将軍家光の鎖国令でポルトガル人とスペイン人が追い出された後も、オランダは「貿易しかやらない、布教活動はしない」と言って貿易を許された。オランダ人は、やがて長崎の出島に閉じこめられるが、幕末の「開国」まで日本との貿易を中国の清とともに独占した。

ビール、アルコール、コーヒー、ガス、船のマスト、外科医のメス、ブリキ、スコップ、ガラス、ズック、カバン（鞆）、ランドセル、インキ、レンズ、オルゴール、ピストルなどなど。オランダとのつきあいも深くて長い。

1853年、ペルー率いる米国の東インド艦隊（インドはアジアを意味する）に迫られて、幕府は遂に開国した。以後、米国、イギリス、フランス、ロシア、ドイツ、イタリアなどとのつきあいが始まる。

幕末以降は米国、イギリスとの交わりの中で、多くの英語が借用語となる。現代の借用語（外来語）の大部分は英語から来たものだが、その他にも、ドイツ語から来たものはエネルギー、アレルギー、ガーゼ、ノイローゼ、ワクチン、カプセル、ギプスなど医学分野にみられる。

フランス語からはシュミーズ、ルージュなど服飾・美容分野、あるいはデッサン、クロッキー、ジャンル、パトロンなど芸術分野に、イタリア語からはソプラノ、アルト、テノール、フィナーレなど音楽分野に多くみられる。ロシア語からはイクラ（鮭の卵）、ウオッカ、インテリ、カンパ、ノルマ、コンビナートなどがある。

面白いことに、2カ国語を使い分けている場合もある。

ビール（オランダ語）とビア（英語）はどちらも使う。「ビール下さい」というときはビールだが、ビア・ガーデンとかビア・ホールの場合は英語のビアだ。ビールを最初に日本に持ち込んだのがオランダ人（17世紀）だからビールが先なのだが、ビア・ガーデンの方は、明治になってから麒麟ビールの創始者の米国人が横浜の工場の隣に開いたのが最初だそうだ。だから英語。

海外旅行から帰国した直後、レストランで料理を注文したあと、うっかり「それとビアもね」と言ったら「ビールですね」と訂正された。

コーヒーもオランダ語。英語の coffee をカタカナで表すとしたら「カフィ」かな。「カフェ・オ・レ」というのはフランス語で、意味は「コーヒー・と・牛乳」だ。つま

り「コーヒー牛乳」だが、「カフェ・オ・レ」の方がおしゃれでグレードが高そう。英語だと coffee with milk となるが、こちらは、ちょっと長すぎる。

同じ単語なのにアメリカの発音とイギリスの発音の2種類あるのもある。volley のカタカナ語は「ボレー」と「バレー」の2種類あって、サッカーやテニスでは「ボレーシュート」とか「ボレー」と言うけれど、バレーボールの「バレー」と同じ語で「ボールが地面に落ちないうちに打ち返すこと」という意味である。サッカーやテニスはイギリスから入ってきた球技だが、バレーボールは米国で考案されたものだそうだ。

同じ単語で発音の違いといえ、virus（病原体）がある。カタカナ語は「ビールス」から「ウイルス」に代わった記憶がある。なぜだろうと思って調べてみた。「病原体」を表す語は、初めドイツ語のカタカナ語で「ビールス」だったが、これを英語風に「ヴァイアラス」と発音する人が増えてきた。そこで、混乱を避けるため、カタカナ語としては元のラテン語の発音に似せて「ウイルス」と統一したとのことだ。西洋医学の主導がドイツから米国に移っていったからだとすれば、ここにも歴史が存在している。

②新しい日本語を作る（和製漢語）

実は、『当世書生気質』にカタカナ語が使われているということを知ったのは、『漢字と日本人』（高島俊男著 文春新書 発行2001年）を読んだからである。「和製漢語」については、この本に詳しく書いてある。以下<>は引用である。

<明治維新以後、日本は、西洋のありとあらゆるものをとりいれるべくつとめた。政治のしくみ、法律と裁判、各種の産業、建築や交通機関、通信手段、学校と教育、学問芸術、軍隊警察、衣服や食品等の生活用品、それに運動やあそびまで。それらにはみな、西洋語の名称や用語がともなっている。日本人はこれをことごとく日本語に訳そうとし、また実際訳した。それに漢字が動員され、数千数万語にのぼる和製漢語がつくられたのである>

<「現代」は modern の、「社会」は society の、生活は life の、「政治」は politics の、「政府」は government の、「産業」は industry の「銀行」は bank の、「保険」は insurance の訳、・・・政治にかかわることばなら、政府、官庁、官吏、公務員、議会、議案、法案、議院、議員、行政、施政、選挙、投票・・・

経済産業なら、会社、企業、銀行、保険、信託、証券、不動産、有価証券、金融、電器、機械、運輸、輸送、物産、精密、計画、経理、営業、総務、企画、立案・・・

交通機関なら、鉄道、線路、汽車、電車、自動車、自転車、道路、飛行機、航空、郵便、電信、電報、電話、・・・

運動やあそびなら、運動、体育、体操、陸上、水上、競技、競走、競泳、野球、庭球、卓球、球技、選手、審判、球場・・・

いくらあげてもキリがない。われわれがこんにち、新聞や雑誌で見ることは、テレビやラジオで聞くことは、その大半は明治以後につくられた「和製漢語」である>

これらの和製漢語を使用することで、日本人は西洋文明を理解し、追随し、やがて西洋式の近代国家建設に成功したのである。そして、「条約改正」にしても「大日本国憲法制定」にしても、そしてまたカタカナ語や「和製漢語」にしても、そこから見えてくることは、明治の人々が必死になって努力した姿である。そのおかげで今日の私たちの国家と社会があり、私たちは近代的な生活を享受できるのだということである。

なお、「和製漢語」の多くが、その後、中国に伝わって使われているようで、「中華人民共和国」の「人民」も「共和国」も和製漢語だと聞けばびっくりする。『漢字と日本人』には、＜中国の外来語辞典には、「日本語」とするものが非常に多い＞として、その一部が紹介されている。

日清戦争（1894－95）後、日本の近代化に学ぼうと中国から多くの留学生がやって来た。中国の孫文もそのひとりである。

日露戦争後の1911～12年、辛亥革命を指導して清王朝を倒し、中華民国を建国した孫文は、台湾でも中国でも「中国の革命の父」と讃えられている。孫文は日清戦争後、広東省で蜂起の計画を立てたが失敗し、日本に亡命した。日本人の支援のもと、1905年に東京で、日本にいた他の多くの中国革命家や留学生とともに中国革命同盟会を結成し、これが辛亥革命の指導的役割を担ったことは有名である。ただし残念なことに、中国の学校教育では、このような「日中協力の歴史」は教えられていない。もっとも、日本でもあまり教えてない。

西洋語を日本語の中に取り入れる方法として、日本人はカタカナ語と和製漢語の二つを工夫したが、西洋の近代文明を日本に取り込む方法は、まだ他にもある。極端なのは、日本語を捨て、英語なりフランス語なり西洋語の一つを採用して日本の国語としてしまうというのである。

以下の<>は、『漢字と日本人』（高島俊男著）からの引用である。

西洋文明に触れた明治初期の人々は痛感した。

<日本は西洋よりはるかにおくれている。何もかもがおくれている>。そして、<政治・経済、産業、交通はもとより、学問も芸術も教育も、あらゆる事物を西洋に学びはじめ>、同時に<言語改革論がさかんとなえられた>

<言語改革論>の一つは、<おくれた言語である日本語を全面的に捨て去り、英語を日本の国語にしよう、という主張である。英語採用論を主張した人は数多いが、そのもっとも著名なのは、文部大臣であった森有礼である>

明治15年（1885）、憲法制定に先駆けて内閣制度が施行されたが、その最初の内閣の文部大臣が森有礼である。

1847年、鹿児島藩士の五男として生まれた森は、1865年、グラバーの手引きで、薩摩藩が幕府に内緒でイギリスに派遣した留学生（いわゆる薩摩スチューデント）のひとりである。その後、キリスト教に傾倒した森は、米国に渡って教団の共同生活に参加した。しかし、明治維新後に帰国すると、明治6年、福沢諭吉らとともに明六社を創立し啓蒙活動を開始する。そして、駐英公使を務めた後、第一次伊藤内閣の文部大臣に抜擢されたのである。

森は、米国の学者にあてた手紙で、<ヨーロッパ語のどれかを将来の日本語として採用するのではなければ世界の先進国と足並みをそろえて進んでゆくことは不可能だと考えている>と述べている。

日本語を捨てて英語を日本語として採用するなどという発想は、現代人からすれば到底理解できないことだが、当時、日本を取りまく国際状況からすれば、考えられない話でもなかったようだ。なにもかも西洋化して、早いところ西洋列強に追いつかなければ、日本はつぶされてしまうと考えた人たちがいたということだ。

<言語改革論>のもう一つの主張は、漢字を捨て、日本語を片仮名か平仮名かそれともローマ字か、とにかくアルファベットと同じように音標文字（表音文字）だけにしてしまうというものである。

現代の私たちの感覚からすれば、漢字を捨てるなんてとんでもないことだと思うが、<軽快で能率的なアルファベット>に対して<おくれた鈍重な象形文字漢字、というのが当時の見方>で、これは日本だけでなく中国も同じだった。やがて、日本政府も中国政府も、音標文字化を国の方針とした。

<魯迅が「漢字がほろびなければ中国がほろびる」といったように、漢字は進歩の足かせと見られた>のである。

<中国も日本も漢字を捨てようとした>。<しかし一挙にやるのではなく「渡りの期間」をおくことにした>。日本の場合、採用する音標文字を仮名にするかローマ字にするかで意見が分かれたが、とりあえず、<漢字の数をへらし、字体を簡略化して、当分の間使用をみとめることとした>

<中華人民共和国は漢字を簡略化して当分の間使用をみとめ、その間にローマ字を普及して遠からぬ将来完全に廃止することとした。しかし、その後・・・日本でも中国でも漢字廃止にすすまず、廃止までの「渡りの期間」だったはずの簡略字体があたかも正式字体になったような中途半端な状態のまま停止している>

<当時の人たちは、日本人にせよ中国人にせよ、言語というものを甘く見ていた>

言語は単に意思伝達の道具ではなく、その言語を話す民族の考え方であり文化であり、思想そのものである。

<音標文字化すれば、以後の日本人は、それまでの日本人が書きのこしてきたものをよめなくなるが、明治のなかばごろまでは、そのことを考慮した者はほとんどなかった>

<日本の言語は、これからの日本人が、過去の日本人と語り合うための道具でもあるのだ、とはだれも考えなかった>

<おなじことが、昭和敗戦後の日本でもう一度おこるのである>

<敗戦後の日本の一般的精神状況は、明治初年のそれにはなはだよく似ていた。あるいは、もっと徹底的であった。明治初年の日本人は、これまでの日本は無価値である、と考えたのだが、昭和の敗戦後の日本人は、これまでの日本はいっさいが邪悪でありまちがっていた、と思った>

<戦争にやぶれたのは、軍事力、経済力の敗北であったのみでなく、文化の敗北なのだ、と識者たちは言った。さらにせんじつめれば言語と文字がおとっていたというのである>

<昭和20年11月12日の読売新聞が「漢字を廃しせよ」と社説で論じたのは当時の気分を代表するものである>

<昭和21年4月、志賀直哉が『改造』に「国語問題」を発表してフランス語を国語にしてはどうかと提唱したことはよく知られる。・・・「私は六十年前、森有礼が英語を国語に採用しようとした事をこの戦争中、たびたび想起した。もしそれが実現していたら・・・日本の文化が今よりはるかに進んでいたであろうことは想像できる。そして、おそらく今度のような戦争は起こっていなかったろうと思った。・・・そこで私はこの際、日本は思い切って世界中で一番いい言語、一番美しい言語をとって、そのまま、国語に採用してはどうかと考へている」>

志賀直哉の作品を中学、高校の国語の教科書で読み、そのすぐれた文章から「小説の神様」とたたえられたと教わった私には、この事実は衝撃的だった。

<昭和21年3月にアメリカから教育使節団が来て日本政府に、漢字を廃止してローマ字を採用せよ、と勧告した。もっとも使節団が最初からそういう勧告をたずさえて来日したのではなく、彼らに接触した文部省の国語官僚や新聞の代表が使節団にうたててそういう勧告を出してもらったのであるらしい>

今でも、小学校では、日常使われている簡単な単語についてローマ字表記で読み書きすることは学んでいるが、これは名詞についてだけである。ところが、私が小学校の頃は、名詞だけでなく文章全体をローマ字で読み書きすることを練習していた。例えば、「きょうは、学校に行きました」を「Kyo wa Gakko ni ikimasita」のような具合だが、これは、日本語の中にローマ字を混ぜるのではなく、日本語そのものをローマ字で表記してしまうということになる。あれは、もしかしたら、漢字を廃止し日本語をローマ字化するためのものだったのかな・・・ちょっとわからない。

<昭和21年11月5日に、内閣総理大臣吉田茂の名で「当用漢字表1850字」が出された。・・・その趣旨は「従来、わが国で用いられている漢字は、その数がはなはだ多く、その用いかたも複雑であるために、教育上また社会生活上、多くの不便があった。これを制限することは、国民の生活能力をあげ、文化水準を高める上に資するところが少なくない」とある>

<過去はすべて間違っていたのだからきれいに忘れて、未来だけを見て新しくやりなおそう、という敗戦後の日本の気分>の中で、明治以来の漢字廃止論者たちは、<政府機関と学校と新聞、この三つを制圧して>、いっきにその主張を実現させようとした。

「当用漢字」の「当用」とは「さしあたって用いる」という意味である。しかし、<近い将来さらにそれをへらし、いずれは全廃にもってゆくのである>というのが彼らの目標だった。

<戦後の国語改革―かなづかいの変更、字体の変更、漢字の制限―がもたらした最も重大な効果は、それ以後の日本人と、過去の日本人―その生活や文化や遺産―とのあいだの通路を切断したところにあった>

<ことの重大性が多くの人にわかってきたのはおおむね昭和30年代になってからだった。知識人たちはある程度まとまって、国語改革に反対し、撤回を要求しはじめた>

<しかし、すでにおそかった。政府が十年も前にきめたことを撤回するはずがなかったし、何千万人という子どもがそれで教育され、育ちつつあった>

<日本人が、敗戦で正気を失い、それまでの日本は何もかもいっさいがわるかった、まちがっていたと思いこみ、足が地につかない状態で（それに占領軍の要求や支持も加わって）決めてしまったことのうち、憲法や学校制度などは、またかえることも、ある程度もとにもどすこともできようが、国語改革だけはもはやいかんともしがたい>。しかし、その後、「漢字廃止・国語の音標文字化」の動きは、<中途半端なまま止まってしまった>

注；「当用漢字」に対する批判から、1981年および2010年に改定され、「常用漢字表」の名称で示された漢字の数は2136字となった。

日本語を捨て英語かフランス語を日本の国語とするという考え、あるいは漢字を捨て仮名文字かローマ字だけの日本語にしようという試みは、今から思えば馬鹿馬鹿しい話だが、明治初期や昭和の敗戦後には、そういう考え方を持つ人々が少なくなかった。そして、「漢字を廃止して日本語を音標文字化する」という動きは、昭和の敗戦後、いっきに進んだ。しかし、結局、それは中途半端なまま止まってしまった。

今や、「漢字検定試験」が実施され、毎年年末になると、その年の世相を表す漢字が「今年の漢字」としてメディアで発表されるなど、漢字のもつ魅力が見直されている。「漢字を捨てよう」などという動きがつい先ごろまであって、しかも、もう少しでそれが実現するところだったなどということは、おそらく多くの日本人が知らない。

中国でも「漢字廃止、音標文字化」は進まず、廃止までの移行期間用だったはずの簡略字体があたかも正式の字体であるかのような中途半端なまま停止している。

しかし、韓国では、漢字が廃止されてしまった。韓国語の語彙の70パーセント以上が漢字語で、その漢字語の多くは和製漢語であるという。ニュースで韓国人のキャスターや政治家のハナシを聞いていて、（あれ？今の単語は日本語みたいだったな）と感ずることがときどきあるが、それは和製漢語だからである。

そして、韓国語の語彙の多くが和製漢語であるのは、そもそも朝鮮に学校を作り教育を普及させたのが大日本帝国の朝鮮総督府だからである。

崔基鎬（チェ・ケイホ）氏は、1923年に生まれの伽耶大学客員教授である。以下の＜＞は、氏の著書『日韓併合 漢民族を救った「日帝36年」の真実』（祥伝社 発行2004年）からの引用である。

＜李朝下で両班^{やんぱん}から蔑視されていたハングル（朝鮮文字）を、必須科目として一般庶民に普及させたのは、日本の総督府であった。・・・日韓併合当時の朝鮮には、教会学校・日本人学校を含めても、近代教育の小学校は100校程度しかなく・・・日本の朝鮮総督府は、一面（日本の村に当たる行政区画）一校を目標として学校を増設し、1936年には、公立学校は2500校、1944年には5213校となり、生徒数は239万8000人に達した。こうして義務教育の就学率は飛躍的に増加した。

総督府は義務教育のみならず、高等教育の充実にも力注ぎ、1924年には、京城帝国大学が創設され。ちなみに台北帝大の創設はその4年後の1928年であり、ともに大阪帝大の1931年、名古屋帝大の1939年よりも早かった。台湾、韓国が今日みられるよう

な高い教育レベルを保っているのは、日本の総督府時代があったからこそで・・・>

注；両班 高麗・朝鮮王朝時代の官僚組織、または特権身分階級 日本
の旧帝国大学9校の中で京城大学（現在のソウル大学）は6番目に設立された

以下は、『朝日新聞が報道した「日韓併合」の真実』水間政憲著 徳間書店 発行2010年）からの引用である。

<朝鮮総督府がいかに教育に情熱を注いだかを、当時の朝日新聞が次のように報じている。

「一面一校の完成 慶南の教育機関普及

慶南道の普通学校一面一校計画は八年度に五校を設置することによって全鮮に^{さきがけ}魁て完成し普通学校総数は二百五十七校となる。（略）釜山鉄道ホテルに関係者百五十四名を招待して一面一校完成祝賀会を開催した」（『大阪朝日・南鮮版』1932年3月5日付）

こうして（朝鮮）各地に学校が急ピッチで作られていった。『朝鮮諸学校一覧』（朝鮮総督府学務局）によると、1943年の時点で、国民学校4271校、認定学校126校、簡易学校1563校、中等学校268校、師範学校（男子）13校、同（女子）2校、書堂3052堂などとなっている>

<（朝鮮においては、ハングルは、教育を受けられない婦女子の文字という位置づけだったのだ。・・・1910年の日韓併合まで、教育機関で（ハングルが）正規に教えられた記録はない。逆に併合翌年の1911年に第一次教育令が施行されてハングルは必修科目となり、初等教育では1学年から6学年まで「朝鮮語及漢文」を、毎週2~6時間教えるよう定められた。朝鮮総督府の言語教育は、近代化のための強化であり、その基本政策は「文盲の一掃」にあった。それを裏付ける記事がある。

「文盲を掃蕩、全鮮的に大運動起こす

半島民の七割以上を占める文盲を徹底的に揚棄することこそ朝鮮統治における根本問題なりとの見地から総督府では地方振興課、社会教育課協力のもとに明年度以降積極的に全鮮の文盲運動に乗り出すこととなった。全鮮七万四千部落中（略）現在二万六千五百部落の夜学により五十六万人への講習を行っているが（略）家計簿のつけ方をはじめ日常生活の必要知識、農産物の知識、算用数字などを教へて行く方針である（略）文盲駆逐運動は大いに注目されている」（『大阪朝日・南鮮版 1939年1月6日付け』>

呉善花（お そんふぁ）氏は、1956年に韓国済州島生まれで1983年に留学生として来日した。その後、評論家として日本で活動している。現在は、拓殖大学教授で日本に

帰化した。以下の＜＞は、氏の著書『漢字廃止で韓国に何が起きたか』（PHP 発行2008年）からの引用である。

＜韓国の国字ハングルは、1443年に李氏朝鮮王朝の第四代王・世宗の発議で作られた、純粋な表音文字である。・・・漢字を読み書きできない者（一般大衆）のために、朝鮮語の音を正確に書き記すことのできる文字としてつくられたものである。ところが、漢字を重んじる高級官僚や知識人たちは、・・・これを俗語として排斥した。・・・そうした背景から、民衆がハングルを教えられる機会も得られず、以後四百数十年もの間、一般民衆にはほとんど使われることがないまま過ぎてしまった。・・・漢字ハングル交じり文が本格的に用いられたのは、福沢諭吉の発案で・・・新聞『漢城周報』（明治19年1886）が最初である。そして、日本の手で学校制度が敷かれてから、一般の人々の間にまで広く普及したのである＞

注；『漢城周報』 福沢諭吉の提案で発行された朝鮮最初の近代的新聞で、日本語の漢字仮名交じり文にならって漢字ハングル交じり文とした

＜韓国の漢字廃止は、1948年に大韓民国が成立し、公用文はすべてハングルで書くべしとの法律が制定されたのに始まる＞

＜1968年、小学校6年生になると、教師から「これからは漢字を勉強しなくてもよろしい」と言い渡され、教室中が私たち生徒の歓声でどよめいたのをよく覚えている。そして、中学に入り、1970年の春からはすべての教科書から漢字が消えていった・・・こうして現在、漢字教育を受けることなくハングルだけで育った者たちが韓国人口の大半を占めるに至っている＞

その結果、どのような不都合や弊害が生じたか。日本の場合で考えてみると、新聞・雑誌、教科書、書物すべての文章が仮名だけで書かれていると想像すればよい。しかも、それを読む側が漢字を全く知らないとしたら、どういうことになるだろうか。

まず、同音異義語の区別ができない。すると、同音異義語の中から、日常語でない抽象的な事柄に関する漢字語の使用が次第に避けられるようになり、やがて消滅していくだろう。

＜私は、韓国人が漢字の廃止によって失ったもののなかでも、最大のものは「概念を用いて抽象度の高い思考を展開すること」だと思ってきた＞

＜韓国が漢字を廃止したためにどのような弊害がもたらされたかは、多くの人々が気づいていながら、これまでは韓国内部で声を大にして語られることがなかった。それは

、ハングル専用主義が戦後韓国の愛国主義・民族主義と深く結びついていたためである>

<ソウル大学国語学部の宋基中教授は、次のようにいっている。「1970年代以前に発行された人文・社会科学の大部分の専門書は、国漢混用で書かれている。高校までの12年間、大学までの16年間の教育を受けて社会に出る人々の大部分は、一般教養紙の記事や題目を読めない。こんなことは、世界のどこの国にありうるだろうか」（『朝鮮日報』1999年2月10日）>

韓国の場合、漢字廃止運動の背後にあるのは強烈なナショナリズムである。かれらは、漢字（その多くが和製漢語）を廃止してハングルだけで表記するという目標を実現すると、それに止まらず、韓国語の中から日本語（和製漢語）を排除しようとした。つまり、ハングルで表記する「和製漢語」も使うなということで、それは現在もなお主張されているようだ。先日（2017年1月29日）の『朝鮮日報』（日本語版）に、ベ・ヨンイル=ギョアン神学大学院大学外来教授という学者が次のような「寄稿」をよせていた。

<【寄稿】理解が難しい日本式の漢字語をいつまで使うのか

韓国人がよく使うことばの中には、理解が難しい日本式の漢字語、日本語、漢字、英語式表記が少なくない。にもかかわらず、習慣のように使っているのは残念だ。例えば「切取線」は韓国語で「断ち切る線」と表現し、「始末書」は「経緯所」、「仮処分」は「臨時処分」、「見習」は「修習」、「敬語」は「敬う語」といえばよい。（略）>

この「寄稿」で述べられているその他の例をいくつか挙げると、

<「茶飯事」は「ありふれたこと」「忘年会」は「送年会」、「食費」は「飯代」、「残業」は「時間外の仕事」、「行楽の季節」は「よそ行きの季節」>などがある。

和製漢語をハングルで言い換えた「」内の言葉が日本語だから、この言い換えのニュアンスの違いはよくわからないのだが、要するに韓国語の中から日本語を排除したいという強い気持ちは伝わってくる。

その一方で、<李朝下で両班^{やんぱん}から蔑視されていたハングル（朝鮮文字）を、必須科目として一般庶民に普及させたのは、日本の総督府であった>（崔基鎬）という事実は無視し、ひたすらハングルを賛美する。

<戦後の韓国では、・・・韓国人は世界一優秀な民族であると執拗に教えられ、その

証拠は「世界で最も科学的な文字であるハングルを創造したこと」にあると、耳にタコができるほど聞かされて続げてきた>（呉善花著『漢字廃止で韓国に何が起きたか』）

英語など西洋の文字は音標文字のアルファベットだけから成り立っている。だったら、韓国語だって日本語だって、ハングルや仮名文字あるいはローマ字だけを用いて表現できるはずだと考えるのは不自然ではない。ところが、それが難しい。日本語も韓国語も漢字語なしでは成り立たない。そして、その大半は明治初期に作られた「和製漢語」なのである。この「和製漢語」が問題なのである。

この点は、高島俊男氏の『漢字と日本人』を読むとよく理解できる。以下の＜＞は引用である。

明治初め、短期間で大量に作られた「和製漢語」は、＜耳で聞いても意味はわからないが字を見ると見当がつく。それはそのはずで、ひたすら文字の意味だけをたよりにつくってあるのである＞

＜日本語の音韻組織はいたって簡単で、日本人が口から発することの音の数はごくかぎられている。・・・同音の語の発生などを考慮しては短期間に何千の語をつくり出せるはずがなかった＞

＜「電線」は electric wire の訳語でデンセンである。伝染病の「伝染」は infection の訳語でこれもデンセンである。electric wire の訳語をつくる際、「electric（電）のwire（線）だから電線がぴったりなんだけど、しかし病気の伝染とおなじ音になってぐあいかわるいなあ」などとは考えないのである。そもそも、伝染も電線もデンセンだ、ということが念頭にうかぶことがないのである。考えるのは字の意味だけであるから。新字音語はすべてそういうふうにできている＞

＜日本では、「伝染」と「電線」とがおなじであることを気にする者はだれもない・・・電燈と伝統とがおなじであることを気にする者もない。電気と伝記を気にする者もない。電化と殿下を気にする者もない。なぜ気にしないのか。字がちがうからである。字がちがえば別のことばだというのが日本人の考えなのである＞

もちろん英語にも同音異義語はある。たとえば、sun と son, wait と weight, write と right, break と brake, cell と sell, way と weigh・・・数え上げればまだまだ多いが、英語の場合は、一つの音に対して異義語は二つまでというのがほとんどである。しかし、日本語の場合は、一つの音を持つ異義語が複数あるのだ。例えば「きせい」を手元の辞書で引くと12もの言葉が並んでいる。しかも、その半数以上が普段よく使っている語なのである。既製、既成、規制、帰省、寄生、氣勢、奇声などなど。

それでは、なぜ日本人は同音異義語で混乱しないのか。この点についての高島俊男氏

の指摘には、なるほどと合点がいく。

<なぜ混乱が起きないのか。それぞれの言葉の背後に漢字がはりついているからである>

<日本人が「仮定の問題」と「家庭の問題」とを正しく聞きわけのしくみを説明するのはむずかしい。これまでそれを説明した者はないと思う。・・・「仮定の問題」ということばを耳にした時、日本人はその文字（漢字）を思い浮かべるのである。・・・その語を耳にした刹那、瞬間的に、その正しい一語の文字が脳中に出現して、相手の発言を誤りなくとらえるのである。そういう神業のようなことを日本人は日常不断におこなって、自身はそのことに気づかない>

<本来、ことばは人が口に発し耳で聞くものである。すなわち、言語の実体は音声である。しかるに日本語においては、文字が言語の実体であり、耳が捉えた音声はいずれかの文字に結び付けないと意味が確定しない。・・・そして、何より重要なことは、日本人がそのことをすこしも意識していない、ということだ。だから、明治以後の日本人の言語生活のなかで漢字がどんなに重要な役割をはたしているかにも気づかない。政府や知識人がくりかえし漢字の削減、ないし全廃を主張してきたのもそのゆえである>

漢字を全廃すれば、多くの同音異義語の中で残るのは日常生活の身近な言葉だけで、時がたつにつれ、抽象的な言葉や概念を表す語は消滅していく。そして、日本人の言語や思考・思想は極めて幼稚なものとなるだろう、というのだ。もちろん、漢字・仮名混じりで書かれた過去の書物は読めなくなってしまう。

パソコンで文章を作成する場合、私たち日本人は、入力しながら漢字変換して文字を確定する。それと同じように、日本人は、会話しながら、頭の中で漢字変換しながら相手の言葉を確定し理解しているのである。これが、近代以降の日本語のメカニズムなのであり、それは日本語の中に大量に存在する「和製漢語」のせいなのである。しかし、また、短期間に工夫された大量の「和製漢字」を介して私たちの先人は、西洋文明を導入し、いち早く近代国家を建設することに成功したのである。

この点で、思い当たることがある。

『映画の英語がわかる』（齊藤兼司著 小学館文庫）を読んで、「なるほど」となんとなく納得したときのことを思いだした。

「日本人が英語を理解するプロセス・・・例えば pencil という単語。リスニングの場合は、何とか音が聴き取れると、頭の中に pencil というスペルが浮かんでくるでしょう。そして、その pencil のスペルを鉛筆という日本語に置き換えて、そこで初めて

鉛筆のイメージが頭に浮かんでくるわけです。つまり、『音』→『英語のスペル』→『日本語』→『イメージ』という4つの段階を経て理解するわけです。一方、ネイティブは『音』→『イメージ』で英語を理解しています。・・・『映画の英語』を理解するためには、『音』→『イメージ』のプロセスで英語を理解できるようにならなければなりません」

これを読んだときは「なるほど」と納得できたような気がしたが、高島氏の著書を読んだあとでは、「なあんだ、音から文字を浮かべる」のは日本人の宿命なんだと納得し直した。

いや、「日本人の宿命」というのは正しくない。私の6歳の双子の孫も「恐竜」、「肉食」、「草食」、「翼竜」、「滑空」、「隕石」、「爆発」、「氷河時代」、「地下」、「絵本」、「探検」、「実験」などの「和製漢語」を使っているが、彼らの頭の中に文字（漢字）は浮かんでいない。そんな漢字は知らない。ストレートに「音」→「イメージ」だろう。しかし、「和製漢語」からなる日本語のメカニズムがすでに脳にインプットされてしまった成人の日本人にとって、「文字を浮かべる」プロセスを省略せよと要求されても、不可能ではないかと思えてきた。

日本の幼い子供たちは、小学校にあがる前後で平仮名を覚え、カタカナを覚えると次は漢字を学ばなければならない。おまけに、これからは、小学校で英語の授業まで受けなければならないという。

英米の子供たちと比べると、その負担の重さに愕然とする。英米の子供たちは、母語の英語だけで事足りるのだ。何というアドバンテージだろう。

しかし、言葉は単なる道具ではない。思想であり文化であり歴史でもある。日本の子どもたちには、また、明治初期、西欧列強の圧力に屈することなく、漢字を駆使して短期間に何千何万という膨大な西洋の訳語を考案した先人たちの労苦があった、そしてその苦労の上に現在があるという歴史に思いをはせて欲しいものだ。そういう歴史を偲ぶ祝日があってもいいのではないかと私は思う。

2017年1月

文化の日と明治の日

<http://p.booklog.jp/book/112874>

著者：内田芳邦

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bon1582/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/112874>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト